

No.88 2007. 10
 (株)よかネット

NETWORK

カライモ生産から始まった集落自立への12年間の取組み
 ～鹿児島県 柳谷集落の視察～ 2

福岡市における都心居住について
 ～人口回帰と住み続けるまちづくり～ 6

第81回地域ゼミ報告 九州大吟醸プロジェクト
 ～大学・学生・生協・NPO・地元地域による
 協働事業で生まれた地酒づくりの取組み～ 9

表紙説明
 中古住宅活用のためには、地元関係機関と市との連携が必要 10

見・聞・食

中国黄土高原地帯（青海省、甘肅省、陝西省）の少数民族地域
 ——ヤクのバター茶は飲めなかったが、中国の深層を少し見た？—— ... 11

失われる地域文化の保存・継承を考える—その2—
 ～文化財指定以外の建造物保護に対する鳥取県の取組み事例～ 17

100年前から、みんなで出資して育ててきた共同店 18

近況

サンセットライブにて、ベロタクシーを漕ぐ 19

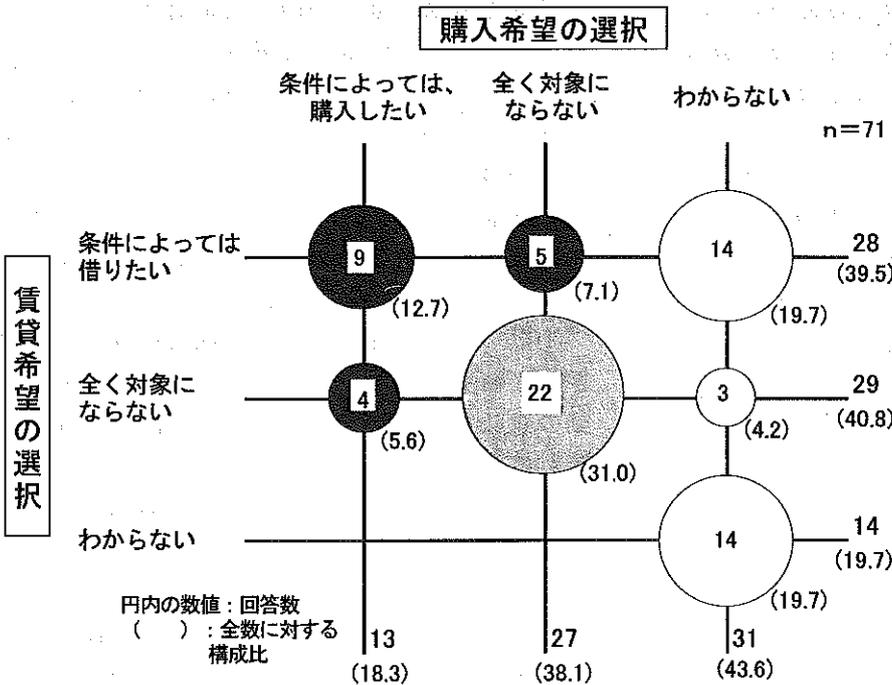
「あくねの華アジ」は、美味しかった 19

蕎麦打ちと「どこでもテレビ博多」ほか 20

本・BOOKS

キラリと、おしゃれ キッチンガーデンのある暮らし 21

●郊外団地における中古戸建て住宅の賃貸ニーズはかなり見込まれる



福岡近郊のベッタウン都市M市のH団地を対象に、その周辺及び近隣市町の賃貸住宅に住む人を対象に投げ込みアンケートを行ったものです。

左図は賃貸希望と購入希望をクロスしてみたものですが、賃貸希望は約4割、購入希望は約2割となっています。また、「購入と賃貸の両方希望」が約1割強、「購入は対象外及びわからない」と購入が不確定な人でも3割弱の賃貸ニーズが見込まれます。

このことから、「中古住宅所有者」と「購入・賃貸したい居住者」をうまく仲介してあげるシステム、住宅の処分やリフォームを考えている人が気楽に相談できる相談窓口が身近なところが必要ではないかと思う。

(福岡県助成研究によるアンケート調査より)

(詳細説明は本文10頁)

カライモ生産から始まった集落自立への12年間の取組み

～鹿児島県 柳谷集落の視察～

山田 龍雄、愛甲 美帆

「柳谷（やなぎだに）」と書いて、地元では“やねだん”という。約130戸、約290人の集落（自治公民館）であり、今、全国的に注目されている。この柳谷集落のことは、1～2年ほど前に、ある行政の情報誌で「休耕田を活用し、集落の人々で芋を植えて集落の活動費を稼いでいる」という記事を見て以来、鹿児島に行く機会があれば、「どのように集落の人々に納得してもらい、協力をして活動できるようになったのか」など、もう少し具体的な経過を是非、知りたいと思っていた。さらに今年の「よかネットパーティ」では、当社の社員が、この柳谷のブランド焼酎である「やねだん」を入手したことから、ますます柳谷へ行きたいという思いは募るばかりであった。そこで、当社を含め11社が加盟しているまちづくりの協同組合「地域づくり九州」の研修旅行で、柳谷集落視察をメインに企画し、7月29日（日曜日）に総勢10名で訪問した。最近、この集落には視察者が多く、改革リーダーである豊重自治会会長の話を聞くことが目的なので、どうしても会長の限られた日程で調整しないといけなくなり、日曜日の訪問となった。

鹿屋市の北側に位置する旧串良町の柳谷集落には、予定の午前10時30分より20分ほど早く到着し、地元の手作り集落センターである「柳谷未来館」で待っていると、豊重さんがまもなくやってきて、すぐ近くにある公民館



柳谷集落の位置

に案内された。公民館の中には既にプロジェクトが準備されており、約30～40分間鹿児島県のTV放送局が放送した映像を見せていただいた。この映像は地元の番組で3～4週間にわたって放送されたものらしく、柳谷集落の活動の経過が要領よくまとめられており、非常にわかりやすかった。映像を見た後に、豊重さんのお話を1時間近く聞かせて頂いた。話の中で特に私が印象深く感じたことを報告したい。

柳谷集落の10年間の活動経過や豊重さんの思いについては、既に豊重さん自身がまとめられた『地域再生～行政に頼らない「むら」おこし』が出版されているので、より詳しい内容を知りたい方は、是非取り寄せて一読されることをお勧めする。簡単な活動経過は次頁のとおりである。12年間の活動であるが、実に様々なことを企て、実現してきていることには感心させられる。

地域を変えるための3つの決意

豊重さんは55歳で自治会長を引き受けた。引き受けたからには、元気がなくなりつつある集落を変えようと決心する。このときに、具体的な3つの決意を立てる。

自分のブレンンってくれる人の力を十分に発揮してもらうようにする。

地域活動をするための自主財源を確保する。奥さんの理解と協力を得る。

について、豊重さんは「地域活動するときに、命令はしないようにした。あくまで活動の意味を理解してもらい、自主的に参加してもらうようにした。」と言われていた。

構想は一人でできても、実際の活動をしていくためには自分一人の力ではできず、手足になってくれる人の協力が必要である。当初からブレンンとなる人からの信頼を確保していたからこそ、これまでの様々な活動ができたのではないかと思った。

柳谷集落の活動記録（地域再生～行政に頼らない「むら」おこし～より抜粋）

- 平成8年：豊重氏が3月に公民館自治館長に集落の習わしより10年早く就任（就任時55歳）
- 平成9年：からいも生産活動
住民参加の手作りわくわく運動遊園建設（ゲートボール場兼多目的コート2面
藤棚、卓球場兼休憩所となる「ふれ愛の館」）を住民の負担金なしで実施
高齢者用を中心としたリハビリコースの設置
まさかのときの緊急警報装置を設置（介護用）
「母の日」に集落有線放送による「親への感謝の気持ちのメッセージ」放送をスタート
- 平成11年：朝の通学時に「おはよう声かけ運動」の開始
- 平成12年：カライモ生産による益金で「寺子屋」（集落に先生を呼んで行う学習塾）のスタート
- 平成13年：カライモ生産の耕地面積を1町歩に拡大、収益金85万円
土着菌製造のスタート
わくわく運動公園内に手作りの噴水とピオトープを設置
高齢者が栽培しやすい山芋づくりの開始
- 平成14年：土着菌センターの建設
お宝歴史館建設
まさかのときの緊急警報装置を設置（煙感知器の設置）
土曜朝市（月1回）の開始
日本計画行政学会最優秀賞 受賞
- 平成15年：まさかのときの緊急警報装置を設置（防犯ベル、全戸設置）
- 平成16年：焼酎やねだんの開発
柳谷安全パトロール隊発足
柳谷未来館建設、手打ち蕎麦の店をオープン
- 平成18年：空き家を「迎賓館」として芸術家誘致の開始
閉店したスーパーを「ギャラリーやねだん」として活用
土着菌で栽培した野菜類（玉ねぎ、山芋など）を活用した加工品づくりを開始
- 平成19年：1月に迎賓館（1号館、2号館）に芸術家3人が入居

について、豊重さんは「行政の補助金は平等主義であり、行政に頼ってはいは本当の地域づくりはできないのは当たり前である。地域で困っていることを解決するのは、地域自身であり、このためには自主財源の確保が必要である。」と言われていた。

は、地域経営の柱となるものであるが、「言うは易し実現は成りがたし」というものでもある。これを実現するためには地域を引っ張る人の力と地域の協力が不可欠であり、この最初の方針が、休耕地を活用したカライモ生産、集落センター「柳谷未来館」建設、集落ブランドの焼酎づくりへとつながっていったのだと思う。

は、やはり経験者でないとなかなか言えないことであると思った。自治会や集落の活動は、ほとんどがボランティアであり、身近な奥さんや家族の理解や協力がないと、自治活動に突入できないと思う。この豊重さんの3つの決意は、地域の大小に関係なく、地域づくりやまち起こしを行っていくための基本となるものと思う。

地域変革のもう一つの切り札は「感動」

豊重さんは「地域活動をしていくためには、単にボランティア活動だけでは限界があり、人に希望を与え、元気にさせるためのもう一

つの鍵が、感動である」というようなことを言われていた。地域活動に自主的に参加しようと思う気持ちを継続していくためには、本当に地域を良くしたいといった愛郷精神がないとできないものである。このためには地域の輪を育むような「感動」という言葉は重要なキーワードとなる。

この感動の仕掛けとして、平成9年から集落の有線放送で毎年「母の日」に、集落を離れて他の土地で生活している子供達や孫達から、日頃は親や祖父母に面と向かっては言えない感謝の気持ちを手紙で送ってもらい「柳谷高校生クラブ」の高校生に読んでもらうようにしたことである。豊重さんは、会長就任当初に地域活動にあまり賛同していない人がいて、この人に理解してもらわないと地域活動は上手くいかないと感じていた。この「母の日」の放送で、今は都会暮らしをしている娘さんの感謝のメッセージを本人の了解なしに放送したところ、「俺を泣かせたのはお前（豊重さん）が始めてや」と言われたそう。この感動が今では、地域活動に反対していた人を、協力と参加に導いたと言われた。

豊重さんは、この娘さんの手紙を読んでいる途中、涙声になり、我々も目頭が熱くなった。豊重さんのこの手紙への思い入れと「感



集落のたまり場となっている未来館 - これも手づくりです

動と感謝」が地域づくりの原動力となることの一旦を感じることができた。

カライモ生産から焼酎づくりによって自主財源の確保

豊重さんが集落の自主財源を確保するためにとった方法は、休耕地を借りてのカライモ生産であった。実際のカライモ生産には「柳谷高校生クラブ」の高校生に、収益金が出たら『東京ドームヘイチローを見に行こう』を目標に協力してもらい、集落住民のサポートを得ながらイモを植えていった。実際には、東京ドームに行くだけの収益は出ず、福岡ドームどまりであったとのことだが、具体的にわかりやすい目標が高校生や地域の人々のやる気を促したのかも知れない。平成14年度には、カライモ生産活動は、集落からの申し入れによる休耕地によって一町歩に拡大し、この年は約85万円の収益となり、この財源が集落行動計画の基礎となっていった。

また、柳谷集落には畜産農家が31戸あり、悪臭の原因となり、洗濯を2回しないといけないなど生活環境にも悪影響を与えていた。そこで、平成12年度から、この悪臭を除去するために研修会を開催し、土着菌（田や畑にある好気性の微生物）を開発した。この土着菌を混ぜた餌を与えると牛・豚の糞尿の臭いがかかり除去されるようになり、生活環境も一変して良くなった。

平成14年度に土着菌センターを建設し、さらに、土着菌を活用した自然農業にも挑戦し、玉ねぎや長いも等の野菜作りをはじめ。その後、平成15年5月に土着菌から作ったカライモを地元の焼酎メーカーにお願いし、柳谷



豊重さんの講演風景

集落のプライベート・ブランドの焼酎づくりを思いつき、5カ月後の11月に焼酎が完成。焼酎の商品名を集落住民に募集し、採用されたのが「やねだん」である。

現在、さらに土着菌で栽培した長いもや玉ねぎなどで、ナガイモのポテトチップ、だし汁、焼肉のタレなど新たな加工品を開発し、自主財源の拡充を目指している。

人口減少予測が、人口増加へ

豊重さんが会長に就任した当時、10年後の将来人口を予測したところ、減少の一途を辿ることが推測された。そこで、昨年からの空き家を活用した人口増対策に取りかかっている。しかし、これらの空き家対策は普通の空き家対策とはひと味もふた味も違う取り組みである。

持ち主からの了解を得た空き家を「迎賓館」と名付け、3カ月に1回は個展を開催してもらうことを条件に、芸術家を招こうというものであった。インターネットで募集したところ、これまでの柳谷集落の活発な地域活動、子供を育てやすいコミュニティがあるといった安心感からか、石川県などから4人の芸術家が移り住んだのをはじめ、Uターンした家族などもいて、集落内の人口が16名ほど増えた。今後、10年後の人口予測は増加に転じるそうだ。過疎化しつつある集落が多い中では画期的なことである。

空き家対策は、単に空き家があるから「どうぞ住んで下さい」では、なかなか移住する動機づけになりにくい。柳谷集落のように子供が育てやすい環境と地域が歓迎してくれる雰囲気があるからこそ、田舎暮らしを求めている人の心を掴むことができる。

豊重さんの話の後には、未来館に併設している食堂で、蕎麦定食を食べながら、焼酎「やねだん」をロックで飲んだ。芋焼酎で良い気分になりながら、本当に福岡から5時間近くかけても価値のある視察ができたと思えた一時であった。また、豊重さんの後継者となる候補者が3人ほどいるらしく、これからの柳谷の活動が途絶えることなく、ますます活発になることを期待したいと思う。

(やまだ たつお)

地域づくりは自分との戦い

今年のおかネットパーティを準備している頃、所員が頼んだ一升瓶のいも焼酎「やねだん」が届きました。このラベルは、味のある「やねだん」という文字とその集落の方々の笑顔の写真が掲載されており、目を惹きます。集落でカライモを植え、焼酎をつくり、その収益を地域の活動に活かしているとのこと。この焼酎の誕生や笑顔は、どのような取り組みから生まれたのか、私も視察に参加し、お話を聞かせていただきました。

やねだんを変えてみせる - 自分との戦い

当日豊重さんにお会いし、最も印象的だったのは、「地域づくりは、自分との戦い」という言葉でした。全国からの視察が絶え間ないなか、私たちの視察当日も朝から娘さん家族を空港まで送って帰ってこられた後で、対応していただきました。集落の自主財源を確保するため、カライモ生産活動から始まり、様々なことを企画されていったそうですが、取り組んで行くなか、協力的では無い人もおられたそうです。しかし「活動に出てくる人だけの取り組みでは、集落の底上げにならない。点ではつぶれる。面にしなくては。」と強く思われ、夜討ち朝駆けで話に行かれたり、皆の心を一つにするような企画を立てたりとあきらめずにはたらきかけていかれました。

見せて頂いたビデオの中で「集落の皆の参加には、それぞれの役割が活かされているのだなあ」と感じたエピソードがあります。

これまで柳谷集落では75歳未満世帯が、自治公民館費7000円と負担金2000円、75歳以上

の世帯は負担金2000円のみという負担だったのが、平成17年には75歳未満の世帯が払う自治公民館費を4000円に減額。平成18年には、収益を上げ、地域に必要な活動などにお金を使っても、余剰金が出たので、集落110世帯全戸にボーナス1万円が還元されました。ボーナスの袋は、集落のおばあさんの書（焼酎のラベルもこの方の書）で、当日は、公民館に集まり、ただ袋を手渡すだけでなく、「いつも（例：笑顔）協力ありがとうございます」とその方の普段の貢献の様子とともに手渡されていました。あるおばあさんの「柳谷ではボーナスが出たと聞いてどろぼうが来なければいいんだけど」という言葉と笑顔が印象的でした。

集落の人の数が増えることが大事

やねだんでは、高校生を中心にカライモを植える活動、集落の寺小屋で学べる環境づくりなどされていますが、集落を維持するには集落の人数が増えることが必要で、中学生や高校生までに地域の大切さ、愛郷の大切さを感じてもらうことが大事だと言われました。山田が先に書いたように、やねだんでは家主から了解を得た空き家を、芸術家に貸す取り組みも行われています。他県から移住された方が、「ここに住もうと決めたのは、下見に来た際に、地域の子供たちがあいさつに来た時、ひとり帽子をかぶっている子がいたのを、上の学年の子が『おい、失礼だぞ』と注意する光景を見たから。ここなら安心して子育てができる」と思われたそうです。

リーダーの育成、コミュニティ活動の仕組みづくり

豊重さんは、視察、講演とその経験を多くの機会でお話されており、地域コミュニティのリーダーの育成の必要を感じておられます。また、このような地域運営の仕組みとして、地域リーダーをボランティアではなく本職としてやれるような仕組みになるよう、市に提案したいと言われていました。また、地域への交付金については、1回カットして今後の見込みがあるもの、自主企画のものなど精査していくことが必要でないかとも言われていました。

あきらめない。行動する。

取り組まれて12年。これまで生産活動を支えてきた方が70歳となり機動力は減ってきているけども、耕作面積を減らしながら、負担なくできるような生産方法の工夫をした自然薯づくり、加工品づくりと収益事業の新たな方向も展開されているようです。

今回、豊重さんのお話を伺って、なんと心を揺さぶられる視察だったかと改めて思います。できることから行動していくこと、そしてその輪を広げていくことをあきらめないで続けることの大切さを改めて感じました。

(あいこう みほ)

福岡市における都心居住について

～人口回帰と住み続けるまちづくり～

山田 龍雄

日本建築学会の全国大会が福岡大学七隈キャンパスを会場として、8月29日から8月31日の3日間にわたって開催された。この前日の8月28日に博多部にある御供所公民館で「住宅の地方性小委員会」が行われた。

住宅の地方性小委員会とは、建築学会に設置されている建築経済委員会の中の小委員会であり、その目的としては、気候・風土の違いによる住宅の地方性の探究及び都市レベルにおける住宅の地方性の探究を行うこととなっている。主に全国の住宅系の研究をされている先生方が加盟されている。

私も10年前に北九州市役所で行われた「住宅の地方性小委員会」に、報告者の一人として参加させていただいた。この時には、丁度福岡県の第六期住宅建設計画五カ年計画のお手伝いをしていた関係で「福岡県の住宅政策」について報告したのであるが、10年も経過すると報告したこと自体、何故私が報告することになったのかも忘れていた。

今回、小委員会の事務局をされた九州産業大学工学部建築学科の船越先生から、5月ごろにテーマの相談を受け、福岡市の都心居住・博多部振興室まで同行し、永松室長に報告のお願いを伺うなど、多少関わったことから、3週間前ぐらいに司会進行の役回りが回って

きた。司会進行は、この小委員会に加盟している大学の先生がふさわしいのではないかと、丁重に断りの電話をしたのであるが、どうしても人手が足りないということで、引き受ける羽目となった。

当日は、まず「福岡市における人口回復とその課題」というテーマで永松由教室長が、福岡市・都心部・博多部の人口、世帯を多様な角度から分析された資料をもとに報告された。続いて、博多部での住環境事業やまちづくりに係わってこられた「協同組合、設計集団 権(かい)」の塚本政利氏、徳田剛一氏のお二人が、現在、住環境の事業をしている博多部大浜地区の概要、事業の経緯、まちづくり活動の報告をされた。その後、質疑応答となったのであるが、住宅を専門として先生の集まりということで4名の方から約10項目ぐらいの質問があった。

各報告については、提供していただいた説明書及びデータをもとに概略を抽出してご紹介し、質疑応答では、特に印象深く感じたことを報告したいと思う。

〔報告〕

都心部、博多部の人口回帰とその課題は？
(福岡市建築局都心居住・博多部振興室 永松由教室長)

- ・福岡市の都心部とは、博多区、中央区にまたがる14小学校区(博多、住吉、堅粕、千代、東住吉、春住、東光、美野島、大名、箕子、警固、春吉、高宮、舞鶴)の約1,450haの範囲をいう。博多部は、都心部の中の博多小学校区(旧冷泉小、旧奈良屋小、旧御供所小、旧大浜小)の約250haの範囲のエリアである。
- ・都心部、博多部の人口は、昭和30年頃をピーク(都心部:約21万人、博多部:4万2千人)として、その後一貫して減少し、平成7年には都心部でピーク時の約半分(約111,700人)、博多部で約35%と1/3(約15,115人)までと底値となっていた。しかし、その後、人口増加に転じ、都心部ではピーク時の約7割弱(約143,000人)、博多部でピーク時の約44%(約18,900人)まで回復してきている。

- ・昭和30年頃の人口密度は全市で84人/ha、都心部で164人/ha、博多部で195人/haと博多部では全市の2.3倍の人口密度であったが、平成7年度においては全市の住居地域平均で87人/haに対して、都心部87人/ha、博多部80人/haと市平均並みとなっている。
- ・都心部では人口が増加に転じているとはいえ、児童数の減少や高齢化が全市レベルを超えて進行している地域があり、市全体と比べて人口構成のアンバランスな状況が生じている。

このまま放置すれば、人口構成のアンバランス化が更に進展し、地域の活力の低下が危惧される。

- ・平成2年頃のバブルを契機として地価は平成4年をピークにして暴落していくのと対照的に住宅着工は、ジグザグをくり返しながらも増加傾向となっている。特に平成7～平成18年度にかけての分譲マンションの竣工状況をみると、都心部で6,146戸、その内博多部で953戸が供給されている。平成12年度の全市平均の世帯当たり人員数2.24を当てはめると、これは都心部で約13,800人、うち博多部で2,100人増えたことを意味し、分譲マンションが人口増、ファミリー世帯の増加に寄与していると考えられる。
- ・最近、博多部でワンルーム型の賃貸マンションが増えてきているが、空き家率も高いという噂も聞いている。
- ・特定優良賃貸住宅(公社借上型)が都心部に22団地、751戸供給し、その入居世帯の約36%が15歳未満の子供を有する世帯であることから、特定優良賃貸住宅が都心部のファミリー世帯増の一定の役割を果たしている。まちなかで住み続けるためのまちづくり
～博多部大浜地区を事例として～
(協同組合 設計集団「權」 塚本政利氏、徳田剛一氏)

まず、徳田氏より大浜地区の概要と住環境整備事業の経緯について話していただいた。

- ・大浜地区では、昭和58年に都市高速の呉服町ランプの建設反対の運動があり、また、人口が減少していたこともあって、昭和60



熱心に報告される発表者の3名
(右から永松室長、塚本氏、徳田氏)

- 年に「大浜校区発展期成会」を発足した。
- ・バブルの影響でワンルームマンションも増え始め、地区のまちづくりに対する危機感が高まってきたこともあり、「大浜校区まちづくり協議会」を結成された。その後、平成10年に「都心居住・博多部振興プラン」が策定され、それ以降市との協働のまちづくりをスタートさせた。
- ・平成12年以降、人口、世帯とも増加しているが、人口構成をみると15～20歳代後半までの人口が増えており、これはワンルームマンションが影響していると考えられる。
- ・大浜地区は、戦災を免れたところで、戦後の戦災復興土地区画整理事業から除外されたエリアで、古い木造家屋が数多く残存していた。
- ・大浜地区の整備課題としては「ファミリー層に重点をおいた都心居住の推進」「老朽住宅の建て替え、短冊状敷地の共同化、協調建て替えの推進」「狭隘道路の改善、道路網の構築」「コミュニティの拠点としての小学校の役割継承」の4つを掲げられた。
- ・小学校跡地と建物の老朽化、細街路が著しい北側地区との一体的なまちづくりを基本方向として、平成12年に「大浜密集事業」の大臣承認を受け、老朽住宅の除却、従前居住者向け住宅の建設、生活道路の整備を実施している。従前居住者向け住宅は、都市再生機構(UR)が事業主体となって事業を行い、平成18年に竣工した。
- ・大浜では、南北道路沿いの建物に対して建築協定(敷地境界線より1mのセットバック)

ク)を40%の同意で行っている。これまで4件で実績がある。

続いて塚本さんより、大浜のデザイン基本計画や住民ワークショップによる公民館の計画づくり、博多部のまちづくり活動などを話していただいた。

- ・まちづくりを初めて10年来、変わらない目標となっている「3世代が安心して暮らせるまちづくり」を基本にまちづくりを進めてきた。
- ・事業者がバラバラに建物や道路を整備していると、まちのイメージも統一したものにならないということで、小学校跡地及び周辺を含めてデザイン基本計画に基づくまちづくりを進めている。地区内で何か事業を行う場合は、地域住民の方々に事業内容の説明をし、住民の方々と一緒に考えていくことを基本としている。私共は、この仲介役、調整役としての役割を果たしている。
- ・大浜地区は、御供所地区に比べて神社仏閣などの歴史資源がなく、地域の特徴がないので、大浜地区全体のイメージアップを図っていくことができればと思っている。
- ・住民の方のデザインイメージとしては、「伝統的なものだけでなく、将来の夢がもてるようなイメージ」を求めている。そこで、ワークショップの中から、デザインの具体的な目標としては「大浜の目印になる」「大浜のコミュニティを象徴する」「親しみや安らぎを感じる」「人の活動を促す」という4つの柱が設定された。
- ・個別のデザイン計画では、低層階に伝統的な大浜のイメージを継承するようなデザイン、また、親しみの持てる景観などをコンセプトとし、3階以上の中高層階を新しい大浜のイメージをつくるような斬新で伸びやかな景観をコンセプトとしている。
- ・公民館の隣接地には、小学校の思い出になるものを記念碑として残すことを目的に、小学生高学年から中学生、お母さん方が参加して、タイルで思い出の絵を描いたメモリアルウォールなるものを創った。
- ・平成5年頃にマンション憲章を制定した。最近もワンルームマンションが増えてきて

おり、マンション居住者が町内会に入らなかったり、ゴミ出しルールを守らなかったりと近隣トラブルが増えているとも聞く。法的拘束力はないが、マンション憲章の啓発をもっとしなくてはいけない。また、マンション事業者とのQ & Aなども住民の方へお知らせしている。

〔質 疑〕

発表者の報告の後、10数項目の質問があった。その中には、内容を詳しく知りたいといった質問と今後の都心居住、あるいはまちづくりとしての問題提起的なものもあったので、質疑応答のいくつかを紹介する。

Q1：現在、人口が増えているということを見ると小学校4校を統廃合したのは間違っていたのではないか。あとの小学校はどうなっているのか。

A1：当時、小学校が老朽化しており、何とか小学校を新しくしたいといった住民側の要望もあった。また、新しい小学校ができたことで、子供を博多小学校に入れたいといった理由で博多部に移り住む人もいると聞いており、新小学校が地区のイメージアップの役割を果たしている。冷泉小学校と御供所小学校は、両方とも別の用途に利用しているが、再度小学校として復活することはないのではないかと。

Q2：分譲マンションが人口増に寄与したとのことだが、分譲マンションは将来のまちづくりからみて戸建て住宅と同様に持続的なまちづくりの点では疑問がある。都心居住では、適正な賃貸住宅などの供給なり、住宅供給を誘導していくことも考えないといけない。この辺をどうみているのか。

A1：市としては住環境整備事業によって賃貸住宅の導入、特定優良賃貸住宅の導入などを行い、一定の成果をあげており、一定の賃貸住宅の導入を考えていけないといけない。

分譲マンションの供給が増えるのは、民間の事業性からみれば致し方ないことである。これで一時的に人口増加に

なることを良いこととわりきらないといけないのではないか。あとは地域のコミュニティを良くして、安心して住みやすい地域をどう創っていくのが課題である。このことが次の世代を受け入れることにつながっていくのではないか。

Q3：大浜地区の建築協定の40%同意とは、
 ということなのか。

A3：段階的な建築協定と位置づけられる。
 建築協定区域の中の40%同意のエリア
 のところで効力を発するものである。

公民館での報告会終了後、参加者の皆さんは御供所周辺の街並みと大浜地区の住環境事業の状況を視察し、延べ4時間近くのスケジュールを無事終了することができた。

(やまだ たつお)

第81回地域ゼミ報告

九州大吟醸プロジェクト

～大学・学生・生協・NPO・地元地域による
 協働事業で生まれた地酒づくりの取り組み～

本田 正明

糸島地域と大学でつくった地酒ブランド

第81回の地域ゼミでは、九州大学の学生や教職員と糸島地域の企業である杉能舎^{すぎのや}などがアイデアを出しあって、九大ブランドの地酒「九州大吟醸」を造った話を九州大学佐藤剛史先生に伺った。

「九州大吟醸」とは、大胆なネーミングだなと思っていたが、九州大学の吟醸ということらしい。そもそもの始まりは、糸島地域に移転した九州大学伊都キャンパスで、森林資源や生物多様性を保存しようと活動していた「環境創造舎」に、地元で酒造りをしている浜地さんが、九州大学と糸島地域をつなぐために、「九大ブランドの酒がつかれないだろうか」と持ちかけたのがきっかけだそう。NPOの代表を務める佐藤さんも、キャンパス内の活動だけでなく、地元とのつながりを模索している時期だった。学生たちは酒造りの仕込み作業から参加、販売には生協が協力、ネーミングは芸術工学研究院の先生がアイディ

アを出すなど、多様な連携も生まれた。このプロジェクトをきっかけに、出方（でかた）という集落の草刈りや清掃活動に九大生が参加したり、小学生と九大生の交流ソフトボール大会を行うなどの交流も生まれている。

九州大吟醸のコンセプトとして「飲めば飲むほど緑が増える」というのがあり、収益の一部を基金として、環境保全に活かそうということである。例えば、管理が行き届かなくなり増えすぎた竹林を昔ながらの里山にあったヤマツツジやどんぐりの森に再生する活動も行っている。

お酒の話であれば、「味はどうなんだ？」といわれるのは、目に見えているので、試飲用のお酒もちゃんと準備した。「しずく搾り」と「手づくり大吟醸」の2種類があって、しずく搾りは、機械で圧力をかけずに搾ったものだそう。「機械による余分な圧力がかからない分、お酒の良い部分のみが採れる」というとおり、フルーティーな香りがするお酒だ。豊かな香りゆえに、食前酒向きという話だったが、個人的には、手づくり大吟醸よりしずく搾りの方が好みだった。

私も九大の出身なのだが、在学していたときは、お世辞にも「ビジネスとか環境に強い大学」とは思わなかったのだが、実にユニークな取り組みが進んでいることにとっても驚いた。プロジェクトに参加している学生は農学部だけではないそうで、学部を超えて学生のよい刺激になっているようである。当社にインターンシップで来ていた学生も、「自分の大学には、そういう活動がないからうらやましい」といっていた。また、伊都キャンパスの学生たちにヒアリングしたときには、「せっかく糸島に来たんだから、糸島ならではのバイトとか、農作業なんかを経験してみたい」という声も聞かれた。学生の地域連携のニーズは意外とあるのかもしれない。逆に高齢化の進む農村集落が多い糸島では、若い労働力を欲しているところも多いと思う。学生も地元も喜ぶプロジェクトはもっと起こせそうだと、自分自身も刺激を受けたゼミだった。

(ほんだ まさあき)

表紙説明

中古住宅活用のためには、
地元関係機関と市との連携が必要

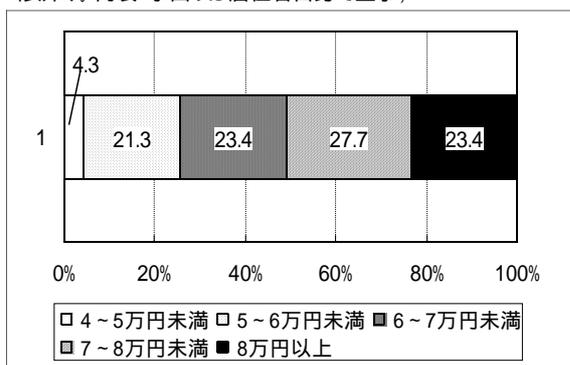
山田 龍雄

前回87号のよかネット記事『住み続けられる郊外団地再生のために～多摩ニュータウン「NPOフュージョン」と「ユーカーリが丘ニュータウン」』の前段で、昨年度、福岡県住宅課からの自主研究助成「高齢者の安心住み替えモデルプロジェクト事業」の採択を受け、M市の昭和40年代に開発された大規模住宅団地（以下「H団地」という）を対象とした中古住宅の活用方策についての調査結果の概略を紹介した。

表紙データの説明の前に、この研究助成の趣旨や開始時期などの概要を述べたい。この事業は、福岡県が平成15年度から初めて、昨年度で3カ年継続して実施している事業である。その目的は、高齢者が安心して住み替えられるようなモデル事業のスキームを基に、中古・リフォーム市場が活性化するなど、実現可能で効果が見込めそうな事業を提案することにある。応募対象者は、県内の不動産事務所、コンサルタント、住宅メーカー、市町村などの民間企業及び市町村と幅広く呼びかけている。

私は、当研究においては、郊外団地の中古住宅がスムーズに賃貸化されるために地元と当該自治体とが連携して行えるような仕組みを提案することと併せて、比較的利便性のよい郊外住宅であるH団地周辺の賃貸住宅の居住者が、「H団地内の中古住宅そのものを購

妥当な家賃(Aパターン:構造体の耐震化、屋根と外壁も改修済み。内装・水回りは居住者自身で工事)



入する、あるいは賃貸する意向があるのかどうか」「その条件は何なのか」といった基礎的なニーズを探ることであった。

そこで、本研究では、H団地周辺及び近隣市の賃貸住宅（外からみてワンルームでないような物件）の郵便ポストに投げ込みでアンケートを配布し、郵送にて回収した。回収率は約8%、回収票数78票と少なかったものの、貴重な基礎的データを把握できたものと思っている。

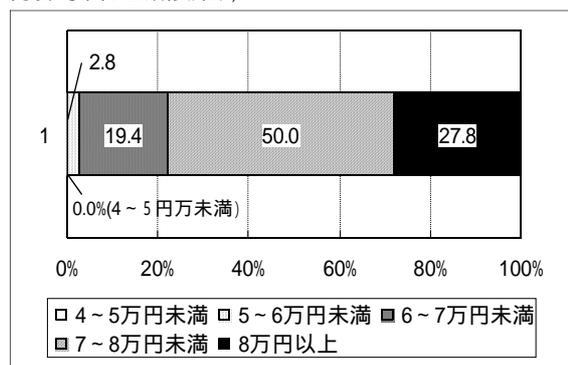
このアンケート調査の前提条件としては、「土地条件：約100坪、価格12～14万円/坪」「住宅条件：築年数20～30年、建坪30坪（間取り4LDK）」ということイメージしてもらい、回答していただいた。

当初、中古住宅の賃貸希望はだいたい1～2割であろうと勝手に推測していたのであるが、この結果からみて、4割近くあったのは想像以上であったし、H団地では中古住宅を借りたいという潜在的な需要は十分にあることがわかった。これはH団地がM市においてJR駅に近接した団地であり、利便性もそれほど悪くない位置にあることも起因しているのではないかと思う。

地元不動産事務所によると、H団地でも利便性のよい物件は、一般の市場で取引が起きているらしいが、問題なのは団地内でも幹線道路から奥に入って利便性が落ちる物件が、市場の取引では残っていき、空き家になるケースが多いらしい。したがって、このような市場から漏れた物件を前もって公的機関が、どのように支援していくのが課題となる。

アンケート調査では、さらに、中古住宅を借りたい意向のある人（48名）へ「借りると

妥当な家賃(Bパターン:構造体の耐震化、屋根・外壁及び内装・水回りは改修済み)



た場合の妥当な家賃」を聞いてみた。この借りる条件として「Aパターン：構造体の耐震化、屋根と外壁も改修済み。内装・水回りは居住者自身で工事」、「Bパターン：構造体の耐震化。屋根・外壁及び内装・水回りは改修済み」の2通りで聞いてみたが、Aパターンでは5万円以上でばらついているが、「7万円以上でもよい」という意向は、約半数程度となっている。Bパターンでは、同じく「7万円以上でもよい」という意向は、約8割以上ある。地元の不動産ヒアリングを行うと、賃貸料は最低でも8万円以上としないと採算は厳しいと言われていたので、家賃ニーズと賃貸化事業との大きな乖離はない。しかし、実際に「売却したい、貸したい」と思っている人でも、「まだ様子見段階で踏ん切りが付かない」「子供の反対がある」「想定し

ている値段と合っていない」など、様々な理由で市場に出てきていない物件も多々あると思われる。空き家が増えていくことは地域のコミュニティとしては問題であるが、売却や賃貸化を考えている所有者の個々の問題に対しては介入しづらく、要望を聞いて納得のいく解決策を実現していくには時間を要するものである。

したがって、現在、夫婦高齢者、単身高齢者で家の引き継ぎが見込めない世帯は、将来の自宅をどうしようかと悩んでいると思うので、地元の公的機関が相談窓口となり、生活相談からはじめ、仲介やリフォームサポートなどの実践活動を町内会、地元の不動産事務所、設計事務所などと連携して行うといった支援システムが構築できないかと思っている。

(やまだ たつお)

中国黄土高原地帯
(青海省、甘肅省、陝西省)の
少数民族地域

ヤクのバター茶は飲めなかったが、
中国の深層を少し見た？

糸乗 貞喜

この旅の建て前は、中国の人口問題研究所が「少数民族の一人っ子政策」について、この地域の少数民族を訪ねて意見交換するということで、それに久留米大学チームが同行した、ということのようでした。

久留米大学経済学部と中国の社会科学院人口問題研究所の研究交流は毎年開かれていて、私も少子化問題などについて北京と久留米大学で話したことがある。中国は、今でも「一人っ子」政策(人口抑制政策)は続いているわけだが、研究者は都市に住んでいるので、少子化問題にも関心を持っている。特に、「改革開放」後、企業(国営?公営?)の経営破綻で、単位(会社の社宅、居住区)が無くなる場所が増えている。そのことによって、自分の所属する集落や町内会のようなものもなくなり、人びとの日常の帰属場所もなくなるという事態が起こっている。

これを「社区問題」といっている。これは日本でも今後の最も重要な都市問題のテーマだが、中国はテーマになりかかっている段階だ。それが就業・失業問題と重なっている。これは25年ほど前に訪中した時の感じたことと重ねて、別を書いてみたいと思っている。

ヤクのバター茶を飲み損ねた話

この旅で狙いにしていたことの一つは、西域の本を読むと出てくる「ヤク牛のバター茶」というものを現地で飲み、青海省の茶とヤク牛のバターを、土産に買って帰るということでした。どちらも失敗しました。いいわけをすると、集団行動、スケジュールがタイト、昨今の事情から「生もの」を買いにくいということです。もう一ついいわけをすると、寺院の灯明はヤクのバターを小さな容器に入れて灯心を浮かべ、火をつけたものでした。この臭いはかなりなもので、それで十分胸まで詰まってしまったということもありました。

最初にヤクを見たのは、西寧(青海省の首都)から青海湖に出かける途中の日月亭の峠のところでした。ここは標高3500mで、真っ白なヤクがいました。きれいな鞍をつけて「乗って写真を撮ったらいくら」という商売です。遠くには黒(これが普通)のヤクもたくさん写っています。の写真は手前の方が



きれいな鞍をつけて「乗って写真を撮ったらいくら」という商売



ヤクの糞と土をこねて作った日干し煉瓦で建築工事中



右はしが五体投地をしている女性



禅問答を続ける学僧たち

ヤクの糞を干しているところ。トラックの向こう側は、ヤクの糞と土をこねて作った日干し煉瓦で建築工事中。上の方にある旗のようなものはチベット仏教の御経をプリントしたもので、山野いたるところ、特に頂上には柱を立ててはりめぐらされている。

ついでにいうと、鳥葬が残っているのはチベット族だけの地域で、混住地域ではないと聞いた。途中で旗などが立っていると「あの丘はそうですよ」などといっていた。

五体投地と禅問答

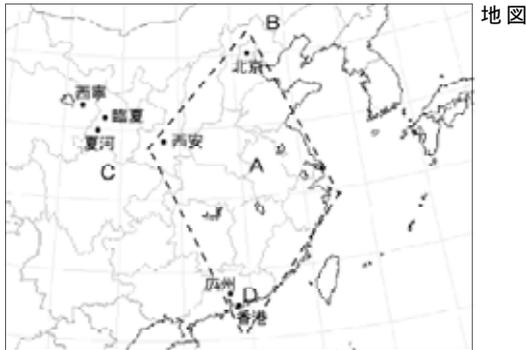
五体投地をしながらお堂を回っている人がいた。青海省西寧市郊外のタール寺である。

の写真の一番右で膝をついている女性が、御堂の周りを五体投地で回っている人である。今立ち上がるころであるが、五体投地の手順は、右手に小さい石(目印用、1～2センチ)を持ち、両手をあわせて三度お祈りした後で両膝をつき、ついで両肘をつき、身体を伸ばして額をつける。腕を伸ばして小石を先端に置く。立ち上がって両足を小石の所まで進めて次の動作に移る。写真を正面から撮ることが出来なかった。今から考えると、10元

か50元でも、喜捨を渡して頼めば撮らせてくれたと思う。自分の眼では十分見た。30代後半ぐらいの女性で身なりも顔もきれいな人だった。上衣もスラックスも皮かビニールで、色も落ち着いていてフィットしていた。

ここを進んで角まで行くと右へ回るのだが、そこは御堂の正面で、同じ場所で五体投地を繰り返す場になっている。さらに、多くの人が立ったままお祈りをする所でもあり、進みにくい状況になっていた。この方は御堂の角のところで、「そっと」といった雰囲気の中で立って待っていた。私はここで去ったが、おそらく観光客が去った後で五体投地を続けたに違いない。何をお祈りしていたのだろう。

実は私も五体投地をしたことがある。一昨年、韓国の禅の三大名刹の一つといわれる智異山でテンプルステイをして、御堂内の朝のお勤めで108回繰り返した。このときは見よう見まねで、両手をあわせて頭上、顔、胸で祈り、両膝をつき両肘をつき、額を床につけて両手の平を捧げるようにあげるとい動作を、えらく早いスピードで繰り返した。膝がガクガクになり100回頃には立ち上がるだけで大変



だった。頭の中は真白だった。

ここはチベット仏教の中心大学のようなところで、大きな寺院がたくさんあった。多くの学僧がいて学んでいた。の写真は「哲学問答」というだったが、いわゆる「禅問答」だと思った。立っている僧が手を振りながら何かいうと、座っている側が答えるというような仕組みに見えた。

チベットとモンゴルはつながっていた

.....中国のかたち（地図を見た感想）

中国の旅行の途次、地図を見て初めて気づいたことがある。私が行ったのは青海湖までだが、そこは東シナ海沿岸から見ると、半分以上奥地にまで行っていたようだ。中国の地図を見ながら、勝手に少し乱暴な地域区分をやってみよう。そのは平地とその他で、色のついた地図の緑色の部分（つまり平地）は、北京からベトナム国境へ一本の直線を引いた東側とにあることが分かる。もう少し丁寧に分けると、北京 西安 広州・香港あたりをつないだ菱形の地域とその他。菱形がむかしの中国の歴史物語に出てくる地域だと思う。

あまりにも乱暴な の区分ではなく、 の考えを取り、以下の区分けをする。

- A 中心になる菱形
- B その北側の東北3省。旧満族の地
- C Aの西側外縁部。内モンゴル・甘肅・四川・貴州・広西から西側
- D その他。香港・マカオ

今まで私が行ったところは、Aゾーンのほんの一部と、Bゾーンの遼寧省だけで、Cゾーンは今回が初めてである。今までの感覚では、モンゴル＝北の草原地帯、チベット＝ヒマラヤの高地で全く別の地域のように感じて



山羊はどんな高地の草でも食べる

いた。ところが、モンゴルとチベットは人びとの顔も宗教もほとんど同じ感じで、馬や家畜を中心とした暮らしを含めて、同じ人びとだと思えた。

高地平原・山岳地帯と中平原地帯

今回行ったところは南シルクロードといわれているところで、地形も山岳・高地平原地帯である。青海省々都の西寧市は標高2275mであり、3500mの日月亭を越えていく青海湖の水面は3195mである。西安では西門がシルクロードの起点だと言っていた。西寧の辺りから、高地山脈の縁辺歩を迂回して西に行くルートは高地ではない。敦煌でも1700mぐらいである。

こんな高地では山羊やヤクの牧畜をしていた。山羊はどんな急峻なところでも、どんな高地でも耐えると言っていた。問題は耐えすぎること、山地の小さい草を根まで食べてしまうようだ。こんなことが九州の黄砂の原因かも知れない。

今回のルートは、高山病になって、酸素補給を受ける人が出るくらい高地である。私も、足は重いし、頭も痛いし、階段や坂道などではへろへろだった。内モンゴルへ行ったことがあるが、1000m程度の高原であり、息苦しいような感じはなかった。

内モンゴルへ行ったのは5年前のことだ。メンバーは20人ぐらいいたように思うが、20才代から60才代までの男女全員が馬に乗り、手綱をもって、だく足で往復二時間の距離を駆けて、すっかりいい気分になってしまった。

の写真は今回のチベット族の村での乗馬。は5年前のモンゴル高原。



チベット族の観光乗馬

今回は夏河市の郊外で馬に乗ることになった。こちらはチベット族の地域である。乗る気になった人の人数を算え、「まとめて払うから」と言って馬に近づくと、馬の手綱を持っていた子供とおばあさんが、それぞれの大声で主張をはじめ、混乱に陥ってしまった。中国人のメンバーが聞いてみると、「まとめることは出来ない、一頭ずつ別々に払え」と言うことである。この人たちは孫とおばあさん（お母さんかも知れないが）が、馬2頭をつれてセットになっていて、家族で馬を貸して稼いでいるのである。実はこの時、このグループのリーダーらしい31才の青年（大人）がいた。彼はヤクを100頭飼っていて、年収は10万元だといっていた。この地では相当のビジネスマンだと思う。彼は話の分かる人だったので、まとめ係を頼もうとし、彼もその気で調整しかけたのだが、ダメだった。

モンゴルでは、前夜におおよその人数を言っておけば、我々でも風を切ったような気分になれる程度の、だく足でモンゴル平原を地平線の彼方まで行ってこられた。夏河のチベット族では、それほど颯爽とは言えない馬を、子供やおばあさんが手綱を持っているのである。モンゴルでは、漢族が乗馬という観光業（商売）をやっていたのに引き替え、こちらは鞍もきれい（清潔）ではないし、チベット族の家庭内職のようだった。

調べてみると、モンゴルは80%が漢族になってしまっているが、この夏河では、5000人の内80%がチベット族だといっていた。ここでも漢族は、市街地中心部で商売をしているのである。商業民族と牧畜民族の違いらしい。



モンゴルの颯爽とした観光産業(2002年)

注；だく足とギャロップ 私は「だく足」とは「小走り」くらいの走り方で、ギャロップは「疾走」のように早い走り方だと思っていた。つまり前者は、私ごとき者でも頬に風を受けていい気分になれる走り方。書くに当たって念のために広辞苑を見ると「前足をあげて足早に駆けること」となっている。不審に思って「新明解」を見ると「馬の少し急な歩き方」となっている。「類語国語事典」では両者を並べて、前者を「やや早く駆けること」で、後者は「馬などの最も速い走り方」となっている。

夏河・ラブラン寺

この町はチベット仏教の宗教都市で、人口5000人の80%がチベット族である。お参りに来る人も多いので、90%以上がチベット族だといわれている。先にふれたタール寺とこのラブラン寺は、チベット仏教の六大寺院である。チベットの学問に対する役割も大きく、仏教の顕教・密教以外にも、天文、地理、数学、医学なども学んでいる。

ここの弥勒菩薩を見てほっとした。中国の寺では、弥勒菩薩というと巨大な腹を波打たせた布袋さんで、なんだかびっくりする。中国仏教の未来願望は「腹が大きくなること」か、と思っていたがチベット仏教では違っていた。我々の親しんだ弥勒さんと同じタイプだった。弥勒菩薩は仏教にとって極めて重要な仏像だから、もともと二種類あったとは思えない。中国内で変身していったのか、弥勒菩薩については日本に速く伝わったのか、気になる感じが残る。



ラブラン寺

ラブラン寺の上部の山腹に、小さい小屋のような真っ白な建物が、多数建っている（の写真の右奥の方）。気になって聞いてみたら「座禅の修業をするところだ」という話だった。また、地震で壊れたこともあると言っていた。その対策として壁と屋根の間にクッションの仕組みが取り入れられている。それは、藁や茅のようなもので出来ている。おそらく、年間500ミリ程度の雨なので、湿気は気にならないのだろう。

中国経済の将来論.....異説（私見）

天水で麦積山石窟をみて、臨夏を経て西安に向かった。集金所のある道路で、たまにスムーズに走れる所があるが、未舗装の道もたくさんあり、3~400キロの道で8時間ぐらいかかったと思う。私たちの通った道は、基本的には谷川に沿っていたのだが、その谷を直線をつなぐ高速道路が、橋とトンネル工事で作られ続けていた。それを見ながら二つのことが気になった。

一つは橋脚があまりに細く、シンプルなこと。ラブラン寺では地震が起こった話をして聞いたが、これで大丈夫なのかということ。この長い距離を一気にやる公共工事のこと。「これなら、田中角栄ばりの公共事業をやれるところはいくらでもある」という感想である。日本では、2008オリンピック危機説、2010上海万博危機説などがやかましいが、奥地を含めた全国規模のケインズ政策と、いくらかの物価上昇で、まだまだ経済拡大は出来るかも知れない、ということも言えそうに思った。

今のところ、まだ私は危機説の方に投票するが、開発余地がすごい国であることは間違



屋根との間がラブラン寺の地震対策



高速道路工事中。橋脚の細いのが気にかかる

いない。また不安の要素の一番大きいものは、官僚社会主義の強さである。今の中国の官僚統制社会主義は、日本の1940官僚国家社会主義より、統制度が強いのではないかと思う。自由にもものが言えない社会では、柔軟で現実対応力のある計画は出来ない。中国も建国以来何度も計画破綻を来しているし、日本も1940年時代と1990年時代に大破綻を起こしている。自分で調べているわけではないので、床屋談義に過ぎないが、中国の奥地には巨大な投資先があることを感じた。もちろん、資本をどこから調達するのか、内部留保を使えるぐらいになっているのかは問題である。

青海湖の水と民間インフラ

青海湖の水は、海水より塩分濃度が高いと聞いていた。早速なめてみて確かめねばならないと思っていた。海水よりかなり濃度は低い。みんなもなめてみて同じことを聞いていた。これで塩を買って帰るという気が失せた。

は民間インフラ。中国はトイレ問題の国である。観光事業のインフラとしては、トイレは道路より重要かも知れない。大都市のレストランなどはきれいになっているが、郊外



民営観光インフラのトイレ



ホテルにも「清真」の文字が



歩道上でレストランのオープン



テーブル設営から10分後には野菜、羊、鳥、牛の回族料理

に出るとお手上げだ。男性の小問題は、地元の人と同じように天然自然の世界で解決できるが、大問題には困る。まして、女性の小・大問題は困る。途中のガソリンスタンドなどに寄るわけだが、あまりの風景に使う気になれないらしい。ついに、ガソリンスタンドのトイレの周辺まで出かけて、大自然の中で人垣を作って問題解決を図ったこともあるらしい。「清潔やった」がその評価。結果として、社会主義市場経済の民営事業が支えているが、極めて不足している。

「清真」という言葉 臨夏の昼飯 西寧のホテルの看板

臨夏で、地元の人がゴチャゴチャ入っているところで昼食をとった。表の看板には「清真」と書かれていた。味はさっぱりしていて、連日攻められている「濃い味」ではなく、旨かった。「少しぐらいビール」という声は、受け付けられなかった。清真には、回族対応の、豚肉を使っていないレストランという意味と、そういう料理も可能という意味の両者があるようだ。ここは一番まじめな清真だった。写真のホテルの看板は後者の意味だ。隣

に回族の医院があった。医院ではどう違うのかは分からなかった。

回族の人口は減らないそうである。結婚相手は回族でないとダメなので、相手に改宗してもらうからである。

回族の街は、何となく活気があった。西安では、日本の京都になぞらえると「清水寺と二条城へ行っただけ？」みたいな感じだった。つまり兵馬俑博物館と空海の寺青龍寺ぐらいであった。最後の夜10～12時頃、地元の人に連れられて回族の街へ行って、少し慰められた。清真のレストランに行くと、店の反対側の歩道までテーブルと椅子を運んで設営してくれた(写真)。料理(写真)は羊、鳥、牛肉と野菜である。味は濃い旨かった。

今回廻った地域では、清真という看板とともに、回族のイメージがかなりあった。

西安の街では、かなり欲求不満が募った。回族の商店街には夜遅く行けたのではあるが、路地の商店街にも、スーパーにも百貨店にも行けなかった。回族の商店街は、どこに行ったのか分からなかったのだが、帰ってきて調べてみると市役所の裏辺りらしかった。

いずれにしる、3000年の歴史を背負う西安の街は、三～四日いても飽きないような気配を感じた。もう一度行って、古い道具屋街や飲食街、屋台の街、骨董屋街なども廻ってみたい。もちろん城壁や門、城外の塔などにも行きたい。ここには古くからの食文化や、3000年の混交で生じた食べ物もあるような気がする。

皆さん、ご一緒しませんか。

(いとりのり さだよし)

失われる地域文化の

保存・継承を考える - その2 -

～文化財指定以外の建造物保護に対する
鳥取県の取り組み事例～
原 啓介

地域文化が生き残るケースと、途絶えてしまふケース、その両者には、どのような違いがあり、保存・活用していくためにはどのような課題があるのか、事例を研究している。

今回は、飯塚市伊藤伝右衛門邸と、中津市の街なみ整備の取り組みをご報告した。物語性がある建物、建築物としての価値が高い建物、住民運動が盛り上がったケース、整備エリアに指定されている場合などは、文化財指定がなくても保存・活用がなされている。しかし、それ以外のケースについては、調査を行い、資料として残るケースはあるが、ほとんどの建物は朽ちていくのみである。

未指定建造物への維持・補修費の補助

文化財指定されていないものをどう守っていくのか、そのモデルケースを探していたところ、インターネットの記事で興味深いものを見つけた。

「鳥取県教委は、市町村指定や未指定にかかわらず文化財建造物の修理費などを助成する『文化財建造物支援事業』に乗り出した」との記事（日本海新聞2005/06/04）。全国でも初めての制度で、制度の新設に伴い、建造物専門の担当者が採用されている。

県内の市町村指定文化財建造物は、ほとんどは木造のために朽ち果てる危険があり、財政的理由で保存修理ができないケースも多く、

文化財指定・未指定も含めて支援を行うため、年間約三百万円の予算を組んだそうだ。助成制度の創設に伴い、現地に出向いて必要な対策や建物の価値を調べる文化財主事の松本さんが採用された。

この記事は、2年前のものであったので、松本さんに現在の取り組みの状況を聞いてみたところ、平成17年度は、市町村が文化財指定した建造物のほか、価値が高く緊急に保全修理の必要がある未指定のものや、市町村独自の判断により、市町村が将来指定する予定の建造物も対象となり、市町村指定については市町村負担の半分を県が支援したとのこと。雨漏り対策や外壁工事が必要な未指定建造物についても、市町村が建造物の所有者に対して支払う補助金の1/2を助成していたそうだ。しかし、同事業は1年で終了し、平成18年度からは、市町村交付金（注1）の中に組み込まれた。

この事業により県から補助金が出されたケースは3件で、2件は市町村の指定文化財、1件は未指定の文化財ではあったが、将来、指定予定のものであった。

結局、鳥取県の場合でも、文化財指定が予定されているものを含めた指定文化財に対する補助となっており、維持補修のための補助金申請を県へ出すかどうかの条件は、市町村が文化財に指定するつもりがあるかどうかという市町村の判断に任されている。

文化財に指定されていないモノ・コトをどう守っていくのか

近年、合併市町村において、新市として文化財を保護していく方針・補助制度の摺り合わせが議論になることもあるらしい。

郷土芸能や伝統行事など、地域・集落が大事にしているコトに対する評価は、行政によって異なるため、合併振興基金を造成し、運用益で補助金を出しているケースもあるようだが、補助金ではなく、まちづくりファンドのような基金によって啓発から維持・補修に至る幅広い文化資源の支援など、住民のボランティア的支援も含めた方策も探っていきたい。

注1) 鳥取県は、平成18年度当初予算要求の

あった市町村向け単県補助金のうち、県に一定の責任のあるもの等を除き、本来市町村で独自に行うもので、小額で奨励的な補助金については交付金化した。

(はら けいすけ)

100年前から、みんなで出資して 育ててきた共同店

雪丸 久徳

沖縄県の北部を廻る旅の途中に、最北端の国頭村の奥という集落にある共同店に立ち寄った。共同店というのは、その集落に住む人々の共同出資により運営されているお店ということで話に聞いていた。私が訪れた奥共同店は、共同店の第1号として、1906年(明治39年)に創設されたものだ。その後、共同店は、沖縄県各地に広まり、今でも約70の共同店が残っている。

奥集落は、赤瓦やグレーのセメント瓦屋根の民家が残る、人口約200人の集落。しかし、よく、こんな辺境の地で100年もの長い間続いてきたものだな、というのが正直な感想である。不思議に思いながら店に入ってみると、おばさん2人が急がしそうに働いている。教室よりひとまわりほど広い店内を見わたすと、野菜や肉、調味料などの食品関係、酒、生活雑貨、野球ボールなどの子供遊び道具などがざっと一通り揃っている。私が店にいる間、地元の人と思われるお客さんが入れ替わり立ち替わりで入ってきては、ちょっとした買い物と会話をして帰っていく。地元のものは何が置いてあるか聞いてみたところ、今は「奥みどり」というお茶と、地元でつくった



奥集落は、那覇空港から100 Km. やんばる地方の最奥の集落である。



奥共同店

「島とうがらし」くらいしか置いていないと答えが返ってきた。この土地のものを土産に買って帰ろうと思っていたので残念だったが、「100周年記念 奥共同店資料1 奥共同店100才」という、この店にしか置いてなさそうな冊子が目についた。「字史 奥のあゆみ(1986)」や「国頭村史(1967)」などを一冊に綴じたものである。

それによると、奥共同店は、当時の資産家である糸満盛邦氏が集落のために自分の商業資本を部落に譲り渡し、それを基本金として設立。その後、集落民が共同出資して株主となり、株主総会では配当も出している。購買機能だけではなく、農林産物の生産、加工販売などの活動(組合事業)を営み、時代の要求に応じて、ある時期には生産活動に重点を置き、またある時期には購買活動に力を入れるという具合に社会の動向に順応してきたことだ。実際には、共同体運営の核事業として、運輸、製茶、発電、酒造といった事業を行ってきたようだ。

共同店が単に「皆で助け合って運営すれば」というレベルの住民の意識では続かなかっただろう。採算上厳しい状況でありながらも今も存続している理由としては、自らで、厳しいルールのもとに共同店・地域経営をしてきたからであり、加えて自分たちの手で作ってきた自信や誇り、地域住民の思いが詰まっているからだと思う。

車に乗れないお年寄りも増えてきている。歩いていける範囲で、共同店のような日常品の買い物ができる場や情報交換の場があると

便利だし、一人暮らしでも少しは安心して暮らせる。皆でお金や知恵を出し合いお互いの暮らしを支え合う、相互扶助機能の拠点としての「共同店」には、集落再生や地域経営のヒントがあるのではないのでしょうか。

(ゆきまる ひさのり)

近況

サンセットライブにて、ペロタクシーを漕ぐ志摩町の芥屋で開催された「サンセットライブ」に行ってきました。といっても観客ではなく“ペロタクシー”のドライバーとしての参加です。サンセットライブは、今年で15年目とのことですが、僕は今回初めて参加しました。最初の頃は、カフェ「サンセット」の店先に地元アーティストが集まるイベント、というイメージだったのですが、今は全国から著名アーティストが参加し、一日約6,000人が訪れ、3日間にわたって開催される大きなイベントになっています。

ペロタクシーとは

よかネットでも何度か書きましたが、“ペロタクシー”とはドイツ製の自転車タクシーのことで、現在全国17都市で運行中しているそうです。車体重量は約150kgで、定員はドライバーを除いて2名。乗客を乗せると、ゆうに200kgを超えます。福岡市内でも、天神を中心にペロタクシー福岡が運行中です。今回はペロタクシー福岡の榎崎さんをお願いして参加させて頂きました。

ドライバーは、かなりのハードワーク

ドライバーの基本動作やコースを教えてもらった後、昼12時頃から走行開始。会場周辺の駐車場はすぐに一杯になってしまいますが、それからがペロタクシーの出番です。一番遠い駐車場は、会場から約2kmの距離にあり、周辺の道路も渋滞がひどいので、小回りのきくペロタクシーの需要はかなりあるようです。運賃は距離に応じて一人100円～300円とリーズナブルなためか、ひっきりなしにお客さんから声がかかる状態でした。

僕が参加した土曜日は、日差しはそれほどきつくなかったのですが、ドライバーは想像



芥屋ののどかな田園地帯をペロタクシーで走る

していたよりもかなりのハードワークでした。

体重70kgと80kgの男性二人組をのせたときなどは、坂を登り切れず、途中でストップしてしまい、「後ろから押してやるのか??」と気を使ってもらった始末。お客さんに手伝ってもらうなんて、お恥ずかしい限りです…。

ドライバーの皆さんの中には、プロのレーサーの方々もおられ、とてもタフな方々ばかり。私はほぼ毎日自転車通勤をしているのですが、午後五時頃にはかなり足が重くなってしまいました。結局、その日はお客様を11組乗せて賃走終了。

その後はライブ会場に入り、開放的な雰囲気と、美味しい料理とビールを味わい、ハードな一日が終わりました。

最後に、榎崎さんや、竹本さんをはじめとするドライバーの皆さん、明るく、温かくご指導していただきありがとうございました。

(原 啓介)

「あくねの華アジ」は、美味しかった

鹿児島への研修旅行の初日の昼食は、鹿児島島の阿久根漁港にある北さつま漁協が経営している市場食堂「ぶえん館」を予約していた。「ぶえん」とは“無塩”と書き、塩漬けしていない“新鮮なもの”という意味である。

この市場食堂は、平成15年に広域合併によって北さつま漁協が発足した段階で、「漁食普及の取り組みによる新たな事業」のひとつとして企画され、平成19年4月末にオープンしたものである((有)職彩工房たくみ尾崎氏プロデュース)。今回の視察者10名は、それ



阿久根沖合いで一本釣りで獲れる美味しいアジ

ぞれ思い思いの定食ものを注文し、別に阿久根の沖合いの比較的浅い海に定着している「瀬つきアジ」の刺身を2皿分注文した。

このアジが、適度に脂がのり、身に弾力もあって、なかなか美味であった。定食も結構ボリュームがあってお腹一杯となり、折角頼んだアジが残るのではないかと心配したが、短時間で食べ尽くされた。やはり美味しいと別腹になるようだ。

今、このアジを「あくねの華アジ」というブランド名で売り出している。値段も1,500~2,000円程度（アジの大小と時期によって変わります）と手頃な値段である。

改めてパンフレットをみると、華アジが何故美味しいのかが納得できた。そこには、「華アジ」について下記のようなことが記されていた。

（パンフレットの説明記事）

あくねの華アジは、全て一本釣漁業で一匹々を釣り上げて漁獲しています。特に鮮度管理を重視し、魚体に少しでも手に触れると人の体温で身が傷むうえ、タモ網を使うと鱗が剥げて傷がつくので、釣り上げて出荷するまで一切手を触れず、出荷時に「活け締め」をすることで、高い鮮度を保っています。

もし、鹿児島方面に行く方は、是非、立ち寄られることをお勧めします。また、漁港で働いている漁師さんを対象に出している朝の魚定食もお得で美味しいとのこと。

（山田 龍雄）

蕎麦打ちと「どこでもテレビ博多」ほか
今年蕎麦打ちを二回やりました。客は4~5人と14~5人です。11月末ぐらいに、新蕎麦の粉でもう一度打ちたいと思っている。もし助けていただける方があれば、里芋の「いも煮」もやれたらいいとも思う。何しろ、自分の持ち時間の減少スピードは速くなるばかりなので。

この号の「キラリとおしゃれ」の書評にも書いたが、今住んで居るこの場所と家を、孫の「ふるさと」にしたいと思っている。力は落ちており、腰がすぐ痛くなるが、畑と果樹園整備に取り組むつもり。

去年の10月から今年の6月まで、「いとしまラジオ」というFM放送で週1時間話していました。FM放送はもともと好きではなく、街角などでスタジオを作って、出演者が格好良く見せるための仕掛けだと思っていました。あるいはかなり大仕掛けで、投資と宣伝をやらねば成り立たないと考えていました。

私はずっと以前から、今後はネットでやる方がよいという案を持ち、「いとしまインターネット百科事典」をやりたいと言ってきました。それはネット動画サイト百科事典のことです。しかし私がパソコンに弱いため、いざというときに「一人でも」というわけに行かず、尻切れトンボです。

ところが今度、FMラジオをやめて、インターネットで「どこでもテレビ博多」をやると言ってこられました。ということになればというわけで、百科事典などを、そのサーバを借りてやってみようかなと思っています。「こんなことも面白いよ」という提案も含めて仲間を募集中です。ご連絡、お待ちしております。

もうひとつ イラクのこと

2004年に、「イラク派兵国々民になるための法則」という文章を書いたことを思い出しました。それが次の文です。

【イラク派兵国々民になるための法則】

テレビを見ていたら「ドイツは派兵反対しているじゃないか。なぜ日本が行くのか」と喚んでいる人がいました。私は「ちょっと違うのじゃないか」と思って調べてみま

した。

	日本	韓国	イタリア	ドイツ	フランス
エネルギー自給率	20%	17%	16%	40%	51%
食料自給率	24%	32%	80%	132%	176%

これを見てよく分かりました。エネルギーも食料もない国は、理屈をいろいろ並べていても、結局派兵して、石油という国益を守るより仕方がない、ということのようです。ドイツやフランスは少々エネルギーが不足しても、食料が十分あればあわてることはないのでしょうか。反対をいう人たちに「エネルギー消費半減計画」とか、「食料輸入半減計画」の音頭をとることをお願いしたい。私も渋々ついていきます。(2004、1、10)

イラク問題やアフガン問題で議論はやかましいのに、何故エネルギーや食糧問題とつながらないのでしょうか。日本のマスコミやジャーナリスト、学者は変わっていますね。(メール itonori@mue.biglobe.ne.jp 糸乗 貞喜)

本・BOOKS



キラリとおしゃれ
キッチンガーデンの
ある暮らし
津端英子 / 津端修一 著
ミネルヴァ書房

<豊かな暮らしづくり博物館>

これは、“津端修一・英子ワールド博物館”のガイドブックです。奥様が主たる著者なので、著者名の所は津端英子が先になっています。82才と79才になられたお二人が、一緒に紡いでこられた「キラリとおしゃれな世界」が、このガイドブックでかなりよく分かります。

“プロローグ ミツバチ物語”は絵本ですが、津端修一さんが決してかたくなな環境保護主義者ではなく、「花のある住宅を造れば



いい」という柔軟性が示されています。津端さんは、ケンカっばやいことで有名？とされていますが、それは「心にもないことはいえない」ということと、「原則を曲げると全部がおかしくなる」というこだわりがあるだけで、実際は柔軟な考え方を持った方だということでした。

“第1章 家族と暮らし”は英子さんの書かれた家族史、住まい史、食べもの史、日常の暮らし史です。この家族の成り立ちと東京・高蔵寺・広島にわたった奮闘記がよく分かります。広島での奥様の畑作りが、1000㎡の博物館の形成によく寄与していることも分かります。

“第2章 キッチンガーデンの12ヶ月”は、博物館の1年が書かれています。おいしい食べものの作り方が出てきて、「とりあえずベーコンだけでも作りたい」というような気分になります。各月のはじめの見出しは「おもてなし」がついています。たとえば4月は「たのしい染織」ですが、小見出しは「4月のおもてなし」「4月の畑づくり」です。このおもてなしの中身が染織なのです。その手順は「東京のひつじ屋で原毛を買い求め、カード(カーディング)して繊維を整え、北欧コピーのしゃれた紡糸機で糸づくり。……原毛からの糸づくりは大変。それを織る広幅(60センチ)の織機は、結構活躍しました。……毛糸編みではなく毛糸織りの風合いがとても新鮮で、皆さんに喜ばれたものです」という具合になって、おもてなし=プレゼントになるのです。

津端家のおもてなしは、細やかで壮大なエネルギーです。“手間ひま”と“思い”が詰まっています。細かい紹介は省略です。

人間は「次の世代に何を残すか」というテーマにふれたところがあります。第1章に「“私たちは/過去の人から受け取ったものに/私たちの精神と労働を加味して/未来の人間に渡すのです”と武者小路実篤さんはいっておられます。この詩が書かれたのは、ずいぶん昔のことですが、改めて現代にその重みを感じさせられました」と述べられています。津端さん夫妻は「暮らしを作る物語と1000㎡暮らしを形作る見本」を残されました。

これが“知恵の受け継ぎシステム”の完成です。

<残すということ、受け継ぐということ>

“残す”というテーマについて、この本を見ながら強く感じました。

私事になりますが、私の従姉が残している「田舎料理の店・風穴庵」について、今年の夏考えました。農家の跡継ぎになった彼女は、農業生産の仕組みとしては残してはいないが、農村で採れる健康な食品・農村で受け継がれてきた漬物などの食品を含めた田舎料理を提供し、都市の人に喜ばれている。これがビジネスとして成り立ち、息子が仕事を継いで、彼女の先代から受け継いだ農村の知恵を自分が身につけ、それで暮らしの基礎になる田舎料理の店というビジネスモデルを作った（当初数年は大変だったようだが、約30年経った今ではよく流行っている）、それを息子に受け継がして、今ではサポートに回っている。

我々以前の親たちは、自分の子供たちに「手に職をつけよ」「人に好かれる人間になれ」「嘘つきは泥棒の始まり」などと、生きていく心構えを教えた。また、職人は腕を磨かせ、農家は農業の知恵を受け継いだ。つまり、今すぐ儲かることではなく、長い人生を生きていくことを前提とした知恵をイメージしていた。

現代の私たちは、社会の仕組みが変わってしまっているので、むかしの人たちがやったようにしても受け入れられない。従姉がやっ

たように、立地条件は生かしながらアレンジし直さなければならない。しかし我々の世代が行っていることは、お金と学歴に偏りすぎているように思う。確かにお金と学歴は相当な資産である。しかしそれを生かすインフラストラクチャー（知恵と場）がいると思う。津端さんの「1000㎡博物館」は、まさに知恵と場の見本である。私も少しでも真似をして、「孫に残す田舎」を糸島の地で作ろうともがいている。

最後に一言。この本を読んだ後で、「高蔵寺ニュータウン夫婦物語」を是非お読み下さい。少しダブル所もありますが、お二人の軌跡が見事に書かれています。また、津端ご夫妻には迷惑かも知れないが、是非「1000㎡博物館」を実際に見に行かれることもおすすめしたい。バラバラに行かれると困られると思いますので、一緒に相談しましょう。

（糸乗 貞喜）

編集後記

由布市（湯布院、庄内、狭間が平成17年10月に合併）における景観の仕事に関わって、湯布院に行く機会が多くなった。日祭日、平日に関係なく観光客が多いのに感心させらる。しかし、最近の湯布院の賑やかな街の佇まいを見ると、初めて湯布院を訪れる人が「行く前に抱いていたイメージと、実際に訪れたときのイメージとは、どの程度違っているのか、年代によって違うのか」など、気になるところです。（だ）

よかネット No.88 2007.10

（編集・発行）

（株）よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

http://www.yokanet.com

mail:info@yokanet.com

（ネットワーク会社）

（株）地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

名古屋事務所 TEL 052-202-1411

（株）地域計画・名古屋